

## メッセージアウトライン サムエル記第一16:1～23

### 「人はうわべを見るが、主は心を見る」

[1]「主はサムエルに言われた。『いつまであなたはサウルのことで悲しんでいるのか。わたしは彼をイスラエルの王位から退けている。角に油を満たせ。さあ、わたしはあなたをベツレヘム人エッサイのところに遣わす。彼の息子たちの中に、わたしのために王を見出したから。』」

主なる神はサウルをイスラエルの王位から退けられた。サムエルはそのことを悲しんでいるが、主は王の位からサウルを退けられたのであって、イスラエルの王政を廃止されたのではない。主はベツレヘム人エッサイの息子たちの中に王となる者を見出したと言われた。

「角に油を満たせ」…王としての油を注ぐため。油はオリーブ油が用いられ、角は油を運ぶ壺の代わりに用いられた。

「ベツレヘム」…パンの家の意。エルサレムの南約八キロメートルのところにある町。

「エッサイ」…ダビデの父。ルツの孫。→マタイ1:5、ルツ記4章

「わたしのために王を見出した」…「イスラエルのために」とは言われていない。主のみこころを行い、主の御名があがめられる人物が選ばれる。サウルはその点において失敗した。

[2-3]「サムエルは言った。『どうして私が行けるのでしょうか。サウルが聞いたら、私を殺すでしょう。』主は言われた。『一頭の雌の子牛を手にし、【主にいけにえを献げるために来ました】と言い、エッサイを祝宴に招け。わたしが、あなたのなすべきことを教えよう。あなたはわたしのために、わたしが言う人に油を注げ。』」

サムエルが住んでいるラマからベツレヘムへ行くためにはサウルのいるギブアを通らなければならない。次の王となる人物に油を注ぎに行くことが知れたら、サムエルはサウルに殺されると恐れた。また、ベツレヘムはサムエルが定期的に行く巡回地ではないので疑惑を招く恐れもある。しかし、主はサムエルの心配をご存じで、一頭の雌の子牛を連れて、主にいけにえを献げるために行くことをベツレヘム行きの理由とするように教え、そこでエッサイを祝宴に招くように告げられた。その時、主が示される人に油を注ぐのである。

[4]「サムエルは主がお告げになったとおりにして、ベツレヘムにやって来た。町の長老たちは身震いしながら彼を迎えて言った。『平和なことでおいでになったのですか。』」

「身震いしながら」…これは普段はベツレヘムに来ることがない預言者であり祭司であるサムエルがいけにえの子牛を連れてやって来たので、何かこの町に大きな

罪があったのかと恐れたのであろう。普通は礼拝者がいけにえの動物を連れて祭司または預言者のところへ行く。

[5]「サムエルは言った。『平和なことです。主にいけにえを献げるために来ました。身を聖別して、一緒に祝宴に来てください。』そして、サムエルはエッサイと彼の息子たちを聖別し、彼らを祝宴に招いた」

「身を聖別して」…異国の神々を取り除き、身をきよめ、着物を着替える。→創世記35:2

招かれたのはベツレヘムの長老たちと、エッサイとその子たち。

[6]「彼らが来たとき、サムエルはエリアブを見て、『きっと、主の前にいるこの者が、主に油を注がれる者だ』と思った」

エッサイは長男から順にサムエルに紹介していった。

「エリアブ」…神は父の意。彼は背も高く容貌もすぐれ、堂々としていたのであろう。この時、サムエルは、この人物こそ主に油を注がれる者だと思った。

[7]「主はサムエルに言われた。『彼の容貌や背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。』」

主は第二のサウルのような人物を選ばれない。サウルは他の誰よりも背が高く、容貌もすぐれていた。しかし、彼はその不信仰のゆえに王位から退けられた。同様に主はエリアブを選ばれなかった。「人はうわべを見るが、主は心を見る」…人は往々にして外見で人を判断する。堂々たる体格や、すぐれた容貌を見てこの人物こそ、ふさわしいと思う。しかし、主はそのようには見られない。主は人の内面、心を見られるのである。これは何の罪や汚れもない聖い人のことを意味しない。そのような人はどこにもいない。そうではなく、自分は神の前に何の誇るどころも良きところもない心の貧しい者であるということを実感し、ただ神の恵みのみにより頼もうとする心の姿勢である。→マタイ5:3, ルカ18:10~14

[8-10] 続いてエッサイは次男アビナダブ、三男シャンマと合計七人の息子たちをサムエルの前に進ませたが、サムエルは「主はこの者たちを選んでおられない」とエッサイに言った。これはサムエルが勝手に判断したのではなく、主によって教えられたことである。

[11]「サムエルはエッサイに言った。『子どもたちはこれで全部ですか。』エッサイは言った。『まだ末の子が残っています。今、羊の番をしています。』サムエルはエッサイに言った。『人を遣わして、連れて来なさい。その子が来るまで、私たちはここを離れないから。』」

八番目の子はエッサイ家の末子として、兄たちからまだ子ども扱いされていたのかもしれない。

その子はサムエルの催す祝宴にも呼ばれず、野で羊の番をしていた。しかし、サム

エルはその子を連れて来るようにと言う。

[12]「エッサイは人を遣わして、彼を連れて来させた。彼は血色がよく、目が美しく、姿も立派だった。主は言われた。『さあ、彼に油を注げ、この者がその人だ。』」

この時点ではまだ彼の名前さえも分からない。しかし、主は「この者がその人(王になるべき人物)だ。彼に油を注げ」と言われた。これは王に任職するための油注ぎである。

人間的に見れば、兄たちを差し置いてなぜ末の弟がとの思いがあるであろう。しかし、人はうわべを見るが、主は心を見る。人の考えと神の考えは違う。

[13]「サムエルは油の角を取り、兄弟たちの真ん中で彼に油を注いだ。主の霊がその日以来、ダビデの上に激しく下った。サムエルは立ち上がってラマへ帰って行った」

ここでこのエッサイの末子の名が「ダビデ」であると初めてわかる。ダビデとは愛すべき者という意味。王になるための油注ぎとは家族にも本人にも明かされない。周りの者たちはきっとダビデは預言者としての召命を受けたのだと考えたかもしれない。

後のユダヤ人歴史家のヨセフォスによると、サムエルはこの時「ダビデの耳元で、低い声で神が彼を王に選ばれたことを説明した」と解説している。その日以来、主の霊が彼の上に激しく下った。これは彼だけでなく、サウルも同様の経験をしている。  
→10:6,10、11:6

[14]「さて、主の霊はサウルを離れ去り、主からの、わざわいの霊が彼をおびえさせた」

「主の霊」と「主からの、わざわいの霊」は違う。「主からの、わざわいの霊」は主の許容される範囲内で御使いあるいはサタン働きによる。→ I 列王22:19~23、II サムエル24:1、I 歴21:1、ヨブ記1~2章 「おびえさせた」…精神的な錯乱状態に陥った。

[15-17]「サウルの家来たちは彼に言った。『ご覧ください。わざわいをもたらす、神の霊が王をおびえさせています。わが君、どうか御前におりますこの家来どもに命じて、上手に豎琴を弾く者を探させてください。わざわいをもたらす、神の霊が王に臨むとき、その者が豎琴を手にして弾くと、王は良くなりますでしょう。』サウルは家来たちに言った。『私のために上手な弾き手を見つけて、私のところに連れて来なさい。』」

サウルの家来たちは彼の症状の緩和のために豎琴を弾く者を探し、その者の弾く豎琴の音色によってサウルが回復できるように進言し、サウルもそれに同意する。これは今でいう音楽療法のようなものか。「豎琴」…ハープのようなものではなく、小さな音響箱に十字型の腕が付き、四本の弦を張った楽器と思われる。

[18-19]「家来の一人が答えた。『ご覧ください。ベツレヘム人エッサイの息子を見

たことがあります。弦を上手に奏でることができ、勇士であり、戦士の出です。物事の判断ができ、体格も良い人です。主が彼とともにおられます。』サウルは使いをエッサイのところへ送って、『羊とともにいるあなたの息子ダビデを、私のところによこしなさい』と言った」

「勇士であり、戦士の出です」…ダビデはまだ実戦に出たことはなかったが、父の羊の群れを襲う野獣を打ち殺す勇猛さが知られていたのであろう。→17:34-35  
「物事の判断ができ、体格も良い人です」…常識や体力、健康もすぐれている。  
「主が彼とともにおられます」…主の霊が彼に激しく下ったことと関係があると思われる。

このように家来たちはダビデについて最良の推薦のことばを語った。それでサウルは使いをエッサイのところへ送り、彼の息子ダビデを自分のところによこすようにと伝えた。

[20]「エッサイは、ろば一頭分のパンと、ぶどう酒の皮袋一つ、子やぎ一匹を取り、息子ダビデの手に託してサウルに送った」

当時は王に謁見する時、贈り物をする習慣があった。「ろば一頭分のパン」とはろばに積めるだけのパンという意味と思われる。伝統的な解釈では約230リットル。「ぶどう主の皮袋一つ、子やぎ一匹」…王に送るにしては非常に質素である。エッサイ家は裕福ではなかったのであろう。

[21-22]「ダビデはサウルのもとに来て、彼に仕えた。サウルは彼がたいへん気に入り、ダビデはサウルの道具持ちとなった。サウルはエッサイのところへ人を遣わして、『ダビデを私に仕えさせなさい。気に入ったから』と言った」

「道具持ち」…王の武具などを持ち運ぶ側近の兵士。サウルは彼を気に入り、自分に仕えさせることをエッサイに伝えた。しかし、これはサウルに付きっきりということではなく、父の家の羊の群れの世話をしつつ、王のもとに通っていたということであろう。→17:15

[23]「神の霊がサウルに臨むたびに、ダビデは堅琴を手にとって弾いた。するとサウルは元気を回復して、良くなり、わざわいの霊は彼を離れ去った」

「神の霊」とはこの場合「主からの、わざわいの霊」のこと。→14-15節  
神の霊がサウルに臨み、彼が精神的錯乱状態に陥った時、ダビデが堅琴を弾くと、わざわいの霊は彼から離れ、症状はおさまり元気を回復した。

サウルは主によって選ばれ、サムエルにより油を注がれ、王に立てられた人物であり、最初は謙遜であったが、やがて自分の考えを優先し、主に対する不信仰、不従順に陥った。そのため、彼は王位から退けられることとなった。主はうわべではなく、心を見られるので、サウルへの取り扱いが変わったのである。そして今、主はエッサイの七人の子ではなく末子のダビデを選ばれた。これも主がうわべではなく、心を見られた結果である。そして主の摂理により彼はサウルに仕える者となった。

貧しい羊飼いの末子が主によって選ばれ、イスラエルのために、神の御栄光を表すために用いられようとしているのである。

私たちもこの箇所から教訓を学び、高慢になったり、不信仰になったり、自己中心になったりして、主の喜ばれない道に行く者ではなく、どのような所に置かれていても、謙遜で柔和な者となり、

主を恐れ、主に仕え、主を愛する者として生きていくことが大切である。必ず主はそのような生き方をしている者を用いられるであろう。→箴言3:5~6